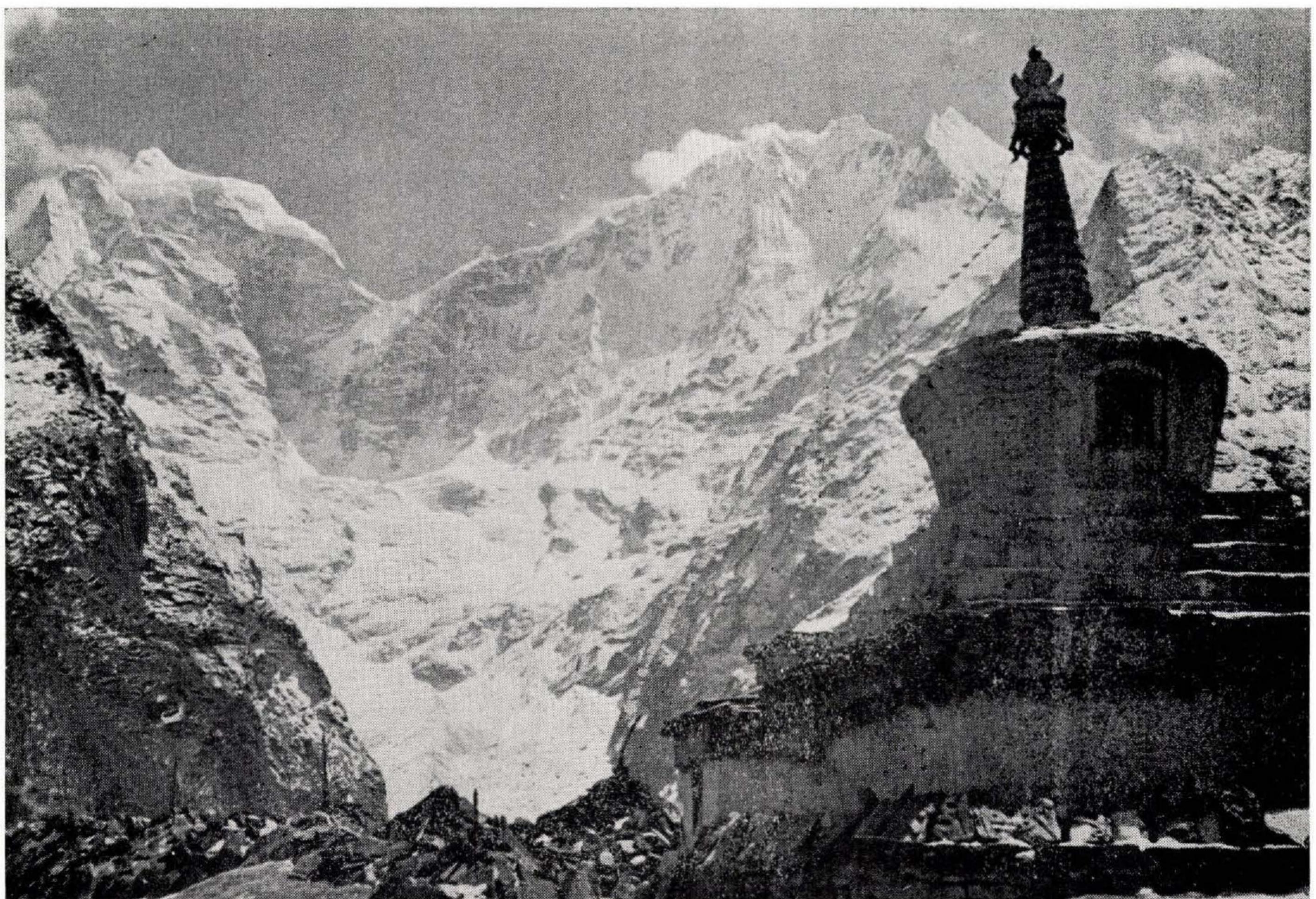


# 針葉樹會報

復刊第38号  
1974年1月



表紙写真説明

タンボチエのチヨルテン（仏塔）

ヒマラヤの山々

かつては秘境として憧れの地であつたタンボチエも、近くにエベレスト・ビュー・ホテルができたこともあつて多くの日本人が訪れるようになり、今や観光地に変わりつつある。

しかしタンボチエから見るヒマラヤの山々は依然として素晴らしい。右に見えるタムセルクのカミソリの刃のような鋭い稜線とヒマラヤひだはハツとする程の美くしさだし、その左に見えるカンテガはまるで城砦のような量感を誇る。このふたつの山は全く対象的だがヒマラヤの美くしさの両面をあらわしているといえよう。

このような六五〇〇と七〇〇〇米前後の山々に気の合つた仲間と出かけ機動的で、つきりした山登りの醍醐味を味わつてみたいものだ。

(中島  
寛)

目次

御岳山秋雨	牛の寝通り	村尾	望月	金二	達夫	2
山行句抄	武尊行走り書き	柿原	謙一	一	一	4
近況報告まで	便り	松下	順吉	一	一	5
大塚	大塚	武	一	一	一	6
松下	松下	順吉	一	一	一	一
大塚	大塚	武	一	一	一	一
山田	山田	亮三	一	一	一	一
晴男変じて雨男になる記	晴男変じて雨男になる記	山田	亮三	一	一	一
会費納入のお願い	会費納入のお願い	山田	亮三	一	一	一
カラコルムを越えて	カラコルムを越えて	中村	保	一	一	一
山崎	山崎	中村	保	一	一	一
石原	石原	拡	一	一	一	一
吉沢	吉沢	脩	一	一	一	一
渡辺	嘉佑	一郎	一	一	一	一
江面のこと	江面のこと	17	16	15	14	12
近辺雑誌	(XI)					
山好きの話						
悪沢・赤石岳神風登山						
カラコルムを越えて						
会費納入のお願い						
晴男変じて雨男になる記						
便り						
近況報告まで						
武尊行走り書き						
山行句抄						

御岳山秋雨

村尾金一

紅葉の頃は綺麗だろう。何時頃が好いかと聞いたら十月下旬と云う。

明末文獻卷二十一

六時五十分新宿発。駒ヶ根で下りると直ぐバ

スがある。しらび平でバスを下りて、ロープウェイで千畳敷に上る。朝、新宿を出てお昼頃には二千七百米の千畳敷まで行けるとは昔は想像も出来ない事だった。若し二十年位前だとしたら朝新宿を出て夕方駒ヶ根泊。翌日一日歩いて千畳敷位だと思う。暫く休んで出かける。登つてゐる中に雨になつてきた。稜線

に出て中岳から玉の窓小屋に来てまだ早いが  
雨のために泊ることにする。

翌日も雨の中を下りて十時過金懸小屋。二時半、敬神の滝小屋に着く。老人と孫娘らしいのが留守番をしていた。額に入つて山の写真のこと聞くと爺さんはなかなか詳しい。前はよく山に入つていたが身体を悪くして此頃は余り行かぬと云う。環境の好い所で

た。たゞ上松からそのまま入ったのではつまらないから、何処かに行つてから入ろうと、近ちゃんと相談した。恵那山はどうだろう。距離や宿舎の関係で二日目の夕方に入るのには

く姿を見せる。

木曾福島の駅で下りて待つていると、間もなく近ちゃんが小田原から新幹線で、名古屋で乗換えてやつて来る。駅前からバスに乗る。バスは王滝川を遡り、御岳湖の北岸を走つて王滝に着く。停留所から少し上つて右に曲ると大きな滝旅館と云うのがある。入つて交渉したら満員ですとアッサリ断られた。外に出

て民宿「住よし荘」と云う標につい上るが一寸見付からぬ。遠くに家が見えるがあれぢや遠すぎる。それでも畠の中を少し行くと見付かつた。おかみさんが一人いて、部屋が三つだが早いから好い処に入りなさいと云う。御岳湖を見下す部屋に落着く。後でパンフレットを見たら収客人員は滝旅館が三百人で王滝の旅館でも最高。住よし荘は十五人で十四軒

紅葉の頃は絶麗だろう。何時頃が好いかと聞いたら十月下旬と云う。

それではその頃また来ようと云う事になつた。たゞ上松からそのまま入つたのではつまらないから、何処かに行つてから入ろうと、近ちゃんと相談した。恵那山はどうだろう。距離や宿舎の関係で二日目の夕方に入るの

六難しい。田立の滝の話も出たが一寸物足りない。此頃バスが御岳の七合目迄登つているので、午前中に頂上往復して木曽福島に下りなつた。十月に入つて近ちゃんが敬神の滝小屋に連絡して、向うから宜しいと云う返事が來た。

十月二十日、小林重吉、F、Sと四人で新宿発六時五十分アルプス一号に乗る。早く行つたおかげで坐れたが酷い混み方だつた。塩尻乗換で約五十分許り時間がある。中央線は何度も通るが塩尻の駅で下りた事はない。何

かたべようと外に出たが、宿屋は何軒かあつて古い宿場街の感じだが、食堂とかそばやの類は少く、あつても準備中だつたり閉つてい

たりする。駅に戻つてそばをたべる。十一時三十五分発の列車に乗つたら空いていて助かつた。轟つていた空が少し明るくなつて、左右に迫る木曽谷の山々は霧と云うより春の霞の様にかすんでいた。木曽福島に近づくにつれ、時々木曽駒の稜線が新雪のチカチカと輝く姿を見せる。

木曽福島の駅で下りて待つていると、間もなく近ちゃんが小田原から新幹線で、名古屋で乗換えてやつて来る。駅前からバスに乗るバスは王滝川を遡り、御岳湖の北岸を走つて王滝に着く。停留所から少し上つて右に曲ると大きな滝旅館と云うのがある。入つて交渉したら満員ですとアッサリ断られた。外に出

て民宿「住よし荘」と云う標につい上るが一寸見付からぬ。遠くに家が見えるがあれぢやなかつた。おかみさんが一人いて、部屋が三つ遠すぎる。それでも畠の中を少し行くと見付岳湖を見下す部屋に落着く。後でパンフレットを見たら収客人員は滝旅館が三百人で王滝の旅館でも最高。住よし荘は十五人で十四軒

ある民宿の中でも少い方だつた。夕食は下の部屋で三組の客が仲よくいただく。

宿のおかみさんが今夜は靈神さまのお祭りだから参つていらっしゃいと云う。宿の少し上が自動車道で赤い提灯がついているから何かと思ついたらそのお祭りのためだつた。浴衣から洋服に着替え、靴をはいて、懷中電灯を持つて畠の中の道を少し上に登ると自動車道に出る。五万分の地図には御岳神社里宮と出ている。本殿の前にまた石段があり電灯が所々についている。四百段近い石段をフウフウ云つて登つた。地図には石段のシルシが四ミリだから二百米。標高差は百米位あるから大したものだ。上は暗いが大きな一枚岩でそれによりそよ様に社殿があつて立派なものだつた。また下りて社殿の前のお祭の椅子に坐つて祝詞を聞いてみると本年は誰某外四十六柱を祭るとか云つてたから今年なくなつた信者を靈神界に送りこむ卒業式（或は入学式か）の様なものらしい。帰つて、明日六時のバスに乗ると云ふので早く床につく。

夜中になつて雨の音が聞こえてウツラウツラ

していたら襷をトントンと叩いて小母さんが起しに来てくれた。五時十五分だ。蒲團をあ

と、例の爺さんに迎えられて二階に上る。相

停に着いたのは六時十五分前だつた。相当の早業だつた。でもバスは遅れて六時十分に來

た。バスは九十九折の道を高度を上げて、七合目、二千二百米の田の原に着く。七時十分

九時前小屋を出て十分位で磧につく。爺さ

だ。大きな田の原山荘に入つて休む。ストーブにあたつていたが雨が止みそうもない。風まで吹いて來た。ついでに御岳にでも登ろう

は雲の中だが昨日の雨がウッスラと雪になつたと云う心掛だから天氣が悪くなるのも仕方がないからう。あきらめて今朝乗つて来たバス

が八時半に出るのにまた乗つて下りる。

原始林を切開いてスキー場にして、曲りく

牛ノ寝通り

西の空、まだ雲はあるが御岳が見える。頭

かと云う心掛だから天氣が悪くなるのも仕方ない。風もない磧の日溜りの中でウットリ

と秋の陽射しを楽しんだ。

新滝、清滝を過ぎて昨日詣でた里宮の前を過

が至る処にある。なだらかな御岳高原を下り

秋の山を歩いてもみじの美しさに接するこ

とが、もう私の生活のなかに十数年も続いて

いる。紺碧の空にはえるもみじを眺めないと、

秋になつたという気分がしないし、秋が深ま

つても冬を迎える気がおこらない。何か忘れ

一で二合目迄行く。雨はやんでいたがまだ雲

は低い。四十分位歩いて敬神の滝小屋につく

と、例の大広間だ。七、八十畳はあるだろう。

二十二日雨あがる。滑川の対岸に陽があたり紅葉が燃える様に輝いている。

ものをしてような妙な気持なのである。

今年は十月のはじめ秩父の大鳥山へ出かけたとき、実によい天氣で、秩父では無論まだもみじに早やかたが、標高千メートルを越えると、既に美しい黄葉紅葉に出逢い、今年は秩父に関する限り、もみじは早やいのではないかと思つたのである。しかし十月二十日過ぎ嵯峨塩鉱泉に針葉樹会の老若会員が集まつたときは、日川沿いのもみじは丁度見ごろで、捨てがたいほどの美しさであつたが、相

憎終日小雨にたたられて、秋の山の佳さは大いに減殺されてしまった。

南会津の大内という、江戸時代の宿場がほぼ完全に遺されているということで、近頃少し有名になつてきた村の民宿へ泊つたのは、偶々十月下旬のことだつたが、その翌日小野岳へ登つてもみじを楽しもうとしたところが、これまた曇天で、沼尾沼附近の情趣に好印象を与えたはかは、とりたてて記すにたるもみじの美しさは味わえなかつた。

今度は十一月上旬に駿河の安倍川の支流、

藁科川の奥、檜尾で J A C 静岡支部のもみじ

会があり、その翌日数名の仲間と大間から七ツ峰へ登つたときは、少し藪をこいだりして、残であろうか。荷をつけた牛が、尾根のなかいかにも静かな山歩きが楽しめたが、やはり空は曇つてもみじはあまり冴えなかつた。この平らな地点ー丁度石マル峠から一時間はうなると、なんとかもみじを青空のもとに見たいものだといつも年より嵩じるとみえる。十一月十八日午後から小暇を得、塩山駅前の登喜和といつも古い商人宿に泊り、翌十九日大菩薩峠から牛ノ寝通りを歩いで、小普川に下り着くのも、もう間もなくといふついて、懶沢山を包む樹林は霧氷で美しく飾られていたが、幸いにも牛ノ寝通りにかかるところから青空がひろがり、人の殆んどないい晩秋の尾根路を、心ゆくばかり楽しむことができた。もみじは尾根の上部では既におそがつたが、大マテイ山をまくあたりから附近の灌木はしだいに色が美しく、眼下の小菅川ができた。もみじは尾根の上部では既におそがつたが、大マテイ山をまくあたりから附近の灌木はしだいに色が美しく、眼下の小菅川

木林が、折りしも西陽をうけて燃えるように木林が、折りしも西陽をうけて燃えるように見えると、植林のうしろの山肌の紅葉した雑木林が、折りしも西陽をうけて燃えるように見えるのだ。まだ日も高い時刻なのに、なんだろうかと不思議に思つたのだが、気がついてみると、植林のうしろの山肌の紅葉した雑木林が、折りしも西陽をうけて燃えるように木林があつて、その間から灯のよう光つて見えたのであった。少し大袈裟に言えば、ハッキリと息をのむような光景だったのである。

大マテイ山の手前で見出した古い野仏は、紅葉した林が光線をうけると、たしかに燃えるように輝いて見える。しかも杉林のよう

な暗いところから枝ごしにそれを見ると、その印象は強烈である。珍らしい経験だったと、今でも忘れない記憶にのこっている。

田元の部落へ下ろうと思っていたが、途中で路をたがえたのか、下りついたところは川久保だった。橋本のバス停は、そこから川上へ歩いですぐだった。（一九七〇年十二月記）

### 山行句抄

柿原謙一

○四月の木曾御岳

今年の山行でできた拙句を投稿いたします。

御笑覧くだされ度く。

○正月の雲取山

山小舎に老岳友と去年今年

原始林ぬけていただく初御空

○一月の秩父御岳山

山の井にそなえしものや小正月

北風や両神山を吹きわたる

○二月の菅平スキー行

古スキーはき若人の群に入る

安曇野をたづねて昼餉柏餅  
尾瀬守りし君の墓訪ふ水芭蕉

老童とみづからゆるし雪見酒

○六月の尾瀬ヶ原

○三月の秩父御岳山と二番峠  
片票の花に憩ひぬ手をふれて

流水に立つ水芭蕉わきて白

鰐はりて岩魚餌を追ふ尾瀬ヶ原

○六月の雲取山・唐松谷

渕碧き新樹の溪のいづこまで

わさび田の朽ちあとにしてわさび萌ゆ

日原は細長き街登山口

かの野麦峠はかしこ雪残る  
雪解谷はとばしるもの岩こえて

○五月の爺岳と安曇野

こぶし愛でのぼりつづけぬ爺ヶ岳

はととぎす頭上に聞きて原始林

春の女王ヒメギフチョウの影いづこ

○八月の朝日・雪倉・白馬

竪渡したぐりたぐらる登山道

雪渓はよう歩かれしまへんと歩きゆく

遠雷のとどろく黒部風おこす

雲きれて大雪渓はひろがりぬ

○八月末の木曽駒

木曽駒のいただきふまず初嵐

駒ヶ岳を木曽路にくだる鳥頭  
葺とり木曽の山小屋守る乙女

○九月の姥湯と安達太良山

おりてきし登山者よぎる露天風呂

武尊行走り書き

松下順吉

安達太良のはんとの空に秋の風

○十月上旬尾瀬ヶ原より奥只見

#### 廃校のまま奥只見初紅葉

山の湯の地酒齒にしむ秋の暮

こんな調子で秋に入りました。十月上旬の尾瀬ヶ原の紅葉はさておらず、これは今夏の異常な雨不足のためかと存じました。葉のさきは紅葉する力を失って、すでに枯渇したといった具合でした。その後は土・日ごとの天気のわるさで、秋の山を歩くチャンスを失しています。

なお、九月の姥湯・家形山・安達太良山行の折には、在仙台の豊田さんに宿のお世話やコースの御注意などをうけ、大いに助かりました。有難くお礼を申しあげます。

今年の十一月三日が連休になるのも、決算の締切りにこたえるなど、むしろイラつきながら七曜表を辿つて日数計算などしてゐた十月中旬になつて、久保さんから三日と四日の連休の山行にお誘いを受けた。

そのような状態で、仲々行く気にならないまゝ、連日連夜の決算の仕事と越年手当の団体交渉から解放されて帰宅した二日の夜八時過ぎ、五週間振りの日曜日快晴の予報をきてどうやら決心をつけた。前夜打合せたのは乗り合わせる列車丈、一時間たらずでリック詰めをすませ早々に就寝。休日にしては大奮

の季節である。流石に近頃では、休日出勤までして追込みをかけるようなことは少くなつたが、この頃になると、決算締切間際の日程に迫られて飛び石だの連休だのを錦織の山で過す楽しみを此二十数年味わつたことはないし、とても思いも寄らない心境に立到ることは今も全く変わつてはゐない。まして、本年はインフレ手当斗争とか云われる越年手当の団体交渉がその辺りから始まるとなれば、精神衛生的には最悪の季節とならざるを得ない。

発の起床で打合わせた水上行きにと家を出がけに、「ホタカという山に行つてくる」と言ひ置いただけで、地図一枚持たない全くいふ気な貴方まかせの有様だった。

その日の高いうちに着いた上の原の夕方、一面に見渡す限り銀色に波うつ萱野の穂波が、東山魁夷描く夢幻的な風景画さながらに、落葉松の金茶色で縁どられた、武尊山頂から北東に延びる須原屋根の山裾に打寄せる夕映えの上の原高原の散策は、慌しかったこの山行の中のつかの間の静逸の一刻だった。

翌朝は秋の早い日暮れに気が急がれて、宿の朝仕度も練上げて貰い、六時半、今秋はじめての霜柱と薄氷を踏んで雲一つない眺望を楽しみながら昼前には武尊山頂え。快晴、微風、快温。三六〇度の大展望を満喫、ヤレヤレ來た丈のことはあつたところまではまことに良かつた。

図上でみたところ、道程、高度差からどう考へても二時間半もあれば川場登山口まで下り、五時迄にはバス停に着けるだろうと前武尊への稜線を下りはじめたのだが、之が昔か

らの修驗道。巻き道などという能率的なつけ方は全く顧慮されてゐない。岩場の多い稜線計と睨めっこしながらの一向に歩らぬ下りをい置いてただけで、地図一枚持たない全くいふの、岩稜も瘤も、丹念に全部一つ一つ越えて氣な貴方まかせの有様だった。

ゆくもどかしさ。ピッチを上げようとしても、大きな木の根に妨げられて機械体操まがいの動作を反覆強いられる苛だたしさ。意地悪く伸ばし放題のラフで、打てども打てども進まぬゴルフをここで思い起したとしても無理のかくしてほんの眼の先の前武尊え着いたのが二時過ぎ。もうこの頃から、明日からの仕事のことが頭をかすめ出して氣もそぞろ。此処を越したら普通の下りになるのかと思つたら相不変の鎖場の連続、丹念なこぶの直登、直降の繰返しで、三時をまわつてもさっぱり高度は下らず、川場の駐車場を遙かに見下す

近況報告まで

## 大 塚 武

稜線の岩場で時間と競争を続ける有様。そう云えば、昨夜同室の連中が、「八時間はかかる」とか、「九時間と書いてあるガイド・ブックもある」とか話してゐたのを上の空できいてゐた記憶がふと甦ってきて、このことだけたのかと正に慄然。二人共、懐電はなし、

今年に入つて山行は二回、外にスキーを一

寸。山の方はニセコの近くにあるワイスホルンといふのと、もう一つは十勝岳の南にある富良野岳、それぞれ二月、三月のスキーの季節。ワイスホルンは、山の形がスイスのワイズホルンに一寸似ているといふので、多分北大の連中がつけたのでしょう。ニセコの蔭で、一寸奥まつたところにあって、山は低いもの、昔はそれなりに良かつたのでしょうかが、いまはバスとリフトで、リフトの終点から少し歩けば山頂に立てる山。北大のI先生が一緒に行かないかというので、北大職員山岳部の方と一緒に行きました。北大職員山岳部というのは、北大山岳部ではないので、北大の教職員の間の山登りの同好会で、女子も沢山入っています。無論先生のなかには、昔北大山岳部OBといふ人は何人もいるようです。それでも、去年は北電の小野君と一緒に、北電山岳部に入れてもらい、今年は北大職員山岳部のお仲間入り、来年はどこの山岳部に入ることやら苦笑を禁じ得ない始末です。肝心のワイスホルンそのものは、天候悪く、何しろ木も、岩も目印になるものが一切ないので、岳を志したのですが、この方も天候悪く、終

僅かのところで引返して登頂に至らず、帰りの貸切りバスのなかでは、マイクをまわされて、山の唄を歌えということで、同行した息子の隣りで、『安曇節』を歌わされて甚だ閉口しました。息子もオヤジの歌の下手さ加減に汗をかいていたことでしょう。

富良野岳の方は、三十年前、初めて十勝岳に登った折、吹上温泉（現在なし）からみた、雪の針葉樹林を前景とした、その山容の美しさに感心して、いつか登ってみようと思つて、札幌の山岳写真家、プロのスキーヤーと一緒に行くことになりました。最近は便利になつたもので、土曜の午后札幌を車で発つて、庵川から空知川沿いの国道を走り、富良野町のドライブインで夕食、それから山にかゝつて、中腹の凌雲閣という山の湯宿に暗くなつて着きました。スキーの季節に半月程、彼も自信があるといつたのですが、この辺に自衛隊の訓練施設があるので、道をあけてくれてあるのです。上ったのを見ると、残念ながら期待のようないつも、岩も目印になるものが一切ないので、岳を志したのですが、この方も天候悪く、終

始富良野岳の姿を見るこども出来ず退散となりました。どうも今年は余程ついていないようです。それでも二度目のときは、途中アイゼンに替えて、上ホロカメトックの稜線まで出たのですが、何分の悪天候で、これ以上無理をしてもと思って引返しました。帰りは、プロのスキーヤーが最後尾となつて、その前を私がすべったのですが、猿まわしの猿よろしく、甚だ振わず、やはり私の山は上の時と、アイゼンを履いたときだけ、下りはとても見られたものではないと悟りました。余談になりますが、この写真家に、来年の私のところのカレンダーのことでお世話になりました。

自然を背景として、健康なレジャーと、若干のお色気もと思って、手前に高山植物のお花畠のある雪の斜面を、男女のプロスキーヤーにすべらしてみたらといふことで、初夏の裸大雪山に行つてもらいました。しかし出来行かず、もう少し良いところがなかつたか、

景があつたのですが、それに及びませんでした。お知らせしておきます。これは全助さんの死

吉川晋平氏

た。また女子スキーヤーを是非画面に入れた後、多分昭和二十一年頃、私が復員して、戦いと思って、一人連れて行つたものゝ、出来災を免れた品川に近い立会川の御宅におくや上つたのは芳しからず、美人でスタイル、フームもいいといふのはなかなか得難いものが持つていても仕方がないので預つて欲しい。

後東京へ帰りますが、それまではせいぜい近所の山を歩いてみたいと思っております。

ヤッケを着た人の滑降の分を採用としましたが、どうも出来栄えは成功とは云えない感じです。この写真家に相談の途中、昔の山のアルバムを見せたりして図柄を検討したのです。こうしてものを書きながら、昔のアルバムを見ていると、小谷部兄、森川兄の顔

が、どうも出来栄えは成功とは云えない感じです。この仲間のことと思うと、些感慨無量なものが、小谷部全助兄の写真を見て、彼も感心していました。北海道には、こういうシャープ

望月敏治氏

針葉樹は楽しく拝見させて頂いております。とに角二人とも強烈な個性を持つていて、後輩に影響を与えるにはおかんな

な山がないと嘆いていました。

(一九七二一、四)

山岳写真家といつても、商業写真の分野で

堀岡 清氏

皆様によろしくお伝え下さい。

体の山が立派でも、さらに写真の技術が優れています。本当に血の通つた山の写真といえ

(九月二八日)

るか否か、小谷部さんなどは、山登りの世界で一流だったことと共に、写真のセンスでも

小泉三好氏

先般、会員江面君事故死、当社内会員一

お全助さんのネガは、全部（と思いますが）

ご無沙汰失礼しています。先輩諸兄のご

私が保管していますので、ここで会員諸兄に

健勝をお祈りします。（九月四日）

佐藤政雄氏

八月一一日。家族連れ、四万温泉ー法師  
温泉の赤沢山ハイク。

九月二一日ー二三日。単独、鬼怒川温泉  
ー田島ー松枝岐にて会津駒ヶ岳、中門岳、

大杉岳登山。小雨、ガスにて視界不良。  
御池ロッジ（国民宿舎）予約満員にて断

わられ翌日の天候不良見込の為燧岳断念。  
田島旅館に泊つて帰る。

十月上旬。北八ヶ岳の予定。

(九月二六日)

石和田四郎氏（奥様より）

昭和四八年一月よりテヘランへ五年間の  
予定で長期出張中。籍も日本ではなくな  
りご家族も四九年四月から移住。ペルシ  
ヤ湾沿岸に石油化学工場建設のため。  
テヘランにおられる丸子氏としめし合せ  
てイランの最高峰デマヴァンドへ登る計  
画もあるとか。そのうち素晴らしい記録が  
寄せられることを期待しています。

(一月二日)

妙高、火打、雨飾。深田さんの百名山を、

### 晴男変じて雨男となるの記

山田亮三

去年の十月はじめ、胸のすくような紅葉の  
旅をした。柿原謙一さんと二人、笹ヶ峰から

君たちと約束して一年たつた。

温泉に下つた。笹ヶ峰も素晴らしかつたが、  
温泉に下つた。笹ヶ峰も素晴らしかつたが、

天狗原の下りのブナの紅葉が、何ともうなる  
ほどの見事さで、あらためて日本の秋の山の

富士見峠の幕営も頗る快適、幕営のための重

荷を担いでくれたのは、柿原さんの長男の和  
夫君と那須美智君といふ女性である。その年  
の夏、飯豊連峰を幕営縦走して以来、二人は  
僕にとっての頼もしい山仲間になつた。

若い二人は前日の夜行で出発、妙高山をこ  
えて黒沢池で僕たちと逢い、富士見峠で別れ  
て彼等は雨飾山に登り、小谷温泉でまた一緒  
になつた。

三日で三つ片付けたことになる。南北アルプ  
スを除けば、そんな芸当のできるところはめ  
つたにあるまい。そう思いながら調べてみる  
と、ありましたなあもう一つ。至仏山、燧ヶ  
岳、会津駒ヶ岳。これなら三日で三つの勘定  
になる。来年の秋は是非これをやろうと和夫  
君たちと約束して一年たつた。

計画の最終段階で会津駒を平ヶ岳に変更、  
さて十月五日出発ということになつたが、僕  
は妙に不吉な予感にとりつかれていた。とに  
かく今年の山行は天気に恵まれていない。雨  
また雨というていたらくで、僕は全く天気に  
対する自信を失つていた。

それまでの僕は、まぎれもない晴男であつ  
た。昨年の三十六回の山行を振り返つてみて  
も、吾妻山、苗場山のスキー登山が素晴らし  
い快晴であつたのをはじめ、大快晴が半分に  
近い十二回、まあまあの好天が八回、雨か雪  
で目的を達しなかつたのは僅かの三回といふ  
成績で、とにかく天気について心配したこと  
はなく、雨具といえばコ一モリ一本、それで  
身体がぬれたという記憶はほとんどない。

その晴男の僕が、今年に入つて俄然として

である。

悪かつた。冬は太平洋岸の山といふ公式に随つてでかけた一月中旬のヤマガタが雪。その時は望月達夫さん一行が一日先行しており、たぶん望月さんの後だろうということになつたが、望月さんの放射能は意外に強烈だつたらしい。その後の山行がどうにもうまくない。

四阿山、浅草岳というスキー登山がいずれも未登頂。浅草岳など三月と四月の二回もでかけ、一回目が大雪、二回目が大雨という念

(柿原さんは強運の晴男のようで、僕らは大明神の尊号を奉っている)のおかげで無風快晴に恵まれ、五月の大町三山(爺ヶ岳、針ノ木岳、蓮華岳)もまあまああつたが、六月の八甲田山ではこっぴどくやられた。酸ヶ湯に三日も泊って、登ったのは大岳、井戸岳、赤倉岳だけ。それも登れば必ずヘソまでぬれるという哀れさである。もつとも帰れば温泉があり。ぬれ物は宿の炭火で乾かせるからよかつたが、いけなかつたのが夏の黒部源流行

黒部川の源流に天幕を張り、五郎沢や赤木沢、さらには薬師沢の左俣あたりを登つてみたい。僕の三十年来の夢であつたが、もう重荷を坦げなくなつた僕には実現困難とほんどあきらめていた。そこに柿原和夫君なる若くて強くて敬老精神に富む青年があらわれ、荷物は持つてあげるから行きましようといふ嬉しかつたなあ。俄然として張切り、天候がもつとも安定するであろう七月末から八月はじめにかけて、二週間に近い休暇をとつた一行は和夫君と、去年の飯豊のパーティの一人であつた河内リエ子君と僕の三人。和夫君は十貫目前後坦いだ。河内君のザックも六貫目に近く、僕のはそれより軽かつたが、それでも卒業以来はじめての重荷を背負つて出発。スタートはよかつた。初日弓折岳頂上の絶好の幕営地で一夜を明かすと、快晴の槍・穂高の大展望である。ハクサンイチゲやシナノキンバイの咲き乱れる夏の北アルプスの良さを満喫しながら、三俣蓮華の小舎から黒部源流に下りたつた時は、天にも昇るような気である。

持。それからの下りが長くていささかくさつたが、それでもその日のうちに祖父平の一角に天幕を張り終えた。和夫君は早速黒部の清流に釣糸をたらすが岩魚は一匹もからない。どうもこの辺からケチがつきはじめたようだ。翌日は休養。その次の日、天気もあんまり香しくないので、とりあえず五郎沢から黒部五郎岳に行く。登るほどに天気は悪化して、黒部五郎のカールではガス、頂上では雨という情なさ。それでも空身登山は有難い。カールから黒部乗越までを風の如く走り下り、重荷にあえぐ縦走の連中を次から次に抜き去る大快走は痛快。乗越の小舎でアルコールを補給して天幕に帰ると、その夜から雨が本格化した。翌日も雨、翌々日も雨。黒部の本流もなると支流の沢遊びどころか、どうやつて脱出するかが問題になつてくる。おまけに祖父平はもともと湿地帯だから、タップリ水を吸いこんだ幕営地はもうどうにもならぬ。まるで池の上に天幕を張つているようで、やがて乾いたものはほとんどなくなつてしまふ。ぐ

つしょりぬれたシユラフにくるまつて寝るわ  
びしさを、十分以上に味うはめになつた。

いくらか雨が小降りになり、沢の水が若干  
ひいたところをねらつて、祖父沢を登つて雲  
の平にでたが、もう天幕はムリなので雲の平  
山荘に泊る。夏の北アルプスの山小舎はまこ  
とに不愉快。その不愉快を忍んだにもかかわ  
らず、天気は一向に好転しない。濃いガスが  
たちこめて時々小雨が落ちる。もうイヤにな  
つた。とにかく下ろうということで、その日  
一日、わき目もふらずにせつせと歩く。雲の  
平から三俣蓮華小舎、双六池、鏡平をへてわ  
さび平まで、下るにつれて天気がいくらか持  
直すようなので、小舎に泊らず天幕を張つた  
ら、その夜沛然たる豪雨に見舞われるという  
オチまでついた。

僕が晴男から雨男に変質したのを自覚せざ  
るをえなかつたのはこの行からで、とにかく  
天気に対する自信を急速に喪失した。

その後も成績は良くない。九月に入つての  
三回の山行も、久方ぶりに登つた富士山が、  
久方ぶりの大快晴であつただけ。魚沼駒ヶ岳

も秋田駒ヶ岳・乳頭山も、とにかく頂上は踏  
んでいる。魚沼駒は小林茂雄君との久潤登  
山があつたが、技折峠で車を捨てて歩きだし  
たトタンに大雷雨が襲来、その日は二十五分

歩いただけで、技折大明神のホコラで一夜を  
明かすという始末であつた。

今年の秋の山行を前に、僕が妙に不吉な予  
感を持ったのは、ザックとこうした経緯からだ  
が、さて結果はどうかといえば、三日で三名  
山どころではない。鳩待峠から尾瀬原を歩き、  
シボ沢温泉小舎を経て尾瀬口へ、銀山平から  
帰京といふ何とも情けないことになつた。

天気も悪かつたが、原因の一半は僕のお天  
氣コンプレックスにある。少くとも平ヶ岳は  
登れないことはなかつた。尾瀬口にてた頃は  
雨も止んでおり、その日登つて頂上附近に幕  
営していれば、その翌日と翌々日は大快晴(一  
しげに空をにらみながらこの原稿を書いてい  
る)だつたのだから、久恋の平ヶ岳の頂上を、

するに天気に対する自信のなさで、雨の天幕  
生活のみじめさを考えすぎたためである。同  
行した和夫君や那須君には悪いことをした。

すると山登りが消極的になる。晴男の自信を  
取戻すにはどうすれば良いか。ここ暫らく山  
を休んでもようをみるか、数打ちや当るで山  
行回数を倍増させるか、何とか手を打たねば  
なるまい。いずれにせよ近いうちに秩父にい  
つて、ヤク落しのおはらいをして貰うつもり  
である。何とか諫一大明神にあやからねばな  
らぬと、いま僕は真剣に考えている。

(一九七三・一〇・一〇)

次に納入方法を記しておきますので、何卒ご協力下さいますようお願い申し上げます。

## 会費納入のお願い

カラコラムを越えて

### ○郵便局への振込の場合

口座番号 東京一八三四五八 針葉樹

復刊第三七号でご報告申し上げましたように、四八年総会（昭和四八年六月二七日於如水会館）で会費の値上げが承認されました。その内容は次のとおりです。

卒業後十年まで 三千円

〃 二十年まで 四千円

〃 二十年超 五千円

○書留の場合  
樹会 普通預金口座 四〇一七五二九

尚、同時にただ安易に会費の値上げをするだけではなく、納入率の向上をねらって、こ

れ迄以上に活動に工夫をこらす必要があるといふことも確認されております。

納入率の向上に関しましては、これ迄の学生による集金、銀行振込、現金書留による納入に加え、郵便局に口座を設けて振込む方法を実施します。これで払込者に五十円の振込料を支払つて貰わなければならないのですが、便りが書ける通信欄もあり便利です。

中村保

ヤングハズバンドの偉業にあやかるような僭越なタイトルには気がひけるが、文字通り『オーバー・カラコラム』を実現できた喜びを素直に表現させてもらうことにします。

昨年のニクソン訪中以前の一九七一年、キッキンジャーが密使として北京に赴いた事は、ご記憶の方もあると思います。この時の空路が今はパキスタン航空がヨーロッパから中国への最短のルートとして利用しており、北京に直接入る唯一の国際線としてユニークな存在となっています。相変わらずパキスタンに縁のある小生、北京行きの経路にこのルートをたどる幸運に恵まれました。そして日本人としては初めての乗客であつた事も思わぬ喜びでした。

六月上旬、カラチ経由中国入りの時の話ですが、その後北京における三ヶ月余の滞在及び

新中国については今更書く事もないのに、こゝでは、カラコラム越えの事を少し紹介したく思つて筆をとつた次第です。

ヤングハズバンドの時代から一世紀近く経た現在、地球は狭くなつた事を実感し、それにも増して機上から大カラコラムとタクラマカンを俯瞰できようとは一時代前の探検家には申し訳けないような気がしました。

ボーイング七〇七機がカラチを早朝四時三十分に発ち、一たんラワルピンディ（イスラマバッド）に立寄つてから一直線にカラコラムに向かいます。早朝澄みきつたコバルトブルーの空をパンジャブ・ヒマラヤの四一千五百メートル級の上を飛び、ナンガバルバッドを右手に観て機は北上します。このあたりまではギルギッドやスカルドーに行つた人ならば経験ずみでの景観で、その素晴らしさを興奮気味に話す場面です。しかし、むしろキッシンジャー ルートではこの先が圧巻です。機窓を右へ左へ巨峰が近づくにしたがつて、どの山か懸命に見極めようと忙しく機内を歩き廻つたことでした。さて、ナンガバルバッドが機の後方

に去ると、ラカポシ・デヨンと続く山なみを左に見つゝ、高度九千米を飛ぶ七〇七はハラモシの上あたりを越え、ヒスパー氷河の上に

そうなところを飛んで行き、右手遠くには、K<sub>2</sub>がひときわ高く、そのピラミッドの頂稜が度は左手にパツーラ山群、そして眼下にはヒスパーの上を渡れば、今度は左手にパツーラ山群、そして眼下にはヒスパーの数々のピーク（不勉強の為、山の確認ができなかつた。）が手にとるように迫つてきます。残念なことに、中国、パキスタン両国の規則で写真は厳禁です。

ナンガバルバッドから小一時間、大カラコラムが機の後ろに立ち退けば、タリム盆地のタクラマカン砂漠の茶褐色の世界に入ります。サンド・ストームの為か、下はかすんで視界はきかず、かつてヘーディンが苦闘したタ克拉マカンを想像しつつ、天山が現われるのを待つこと約二時間、果して、七千米級の天山が姿を見せました。しかし、この方は遠望だけで機は東に向かい、恐らく、ロブノール上空の

つ飛びでした。カラコラムからシルクロードと、先駆者が苦難の旅をした中央亞細亞の空での約五時間は、エクサイティングというふさわしい経験でした。いづれまたの機会に今度は逆に中国からパキスタンへ飛んでみようと思つています。日中航空協定が結ばれて、やがて、ヨーロッパー・パキスタン－北京－東京のルートが開かれるようになるので、その時はドル箱ルートになることでしょう。

### 一 住所変更は至急ご連絡を

総務幹事 中村雅明宛に変更の葉書を下さい。会報が届かないと困りますので。

宛先

中村雅明  
181

三鷹市下連雀二一四一十二

## 悪沢、赤石神風登山

### 山崎 拡

南ア南部はそのアプローチの不便さからわれわれ勤め人にはどうも縁の遠い存在である。諸事便利になつた今日なんとか方法はないものかと今夏それがギリギリの四日間の夏休みをつかつて試みたのが以下のリポートである。

## 山好きの話

### 石原脩

関東の名物カラッ風の舌端は、上信越線の大宮から上尾の間まで、ベローッと伸びます。その上尾から北々西に二十キロの吹上町が私の赴任先ですから、この文がお目にとまつている頃は、枯葉と一緒に吹きまくられていましょう。

ら。

ここで冬も今度で四回目になりますが、今冬はもっと寒くしてやろうとのことで、二ヶ月程高緯度の国を廻らされることになります。正月から二月いっぱいは米国から西独に居ります。帰りがけにジュネーヴに行き、八十キロ程山に入ったシャモニーに泊りたいと思っています。同地には義弟の知人がスキーテacherで、今冬は滞在することですし、それにいちばん大事にしていたピッケルの「

から北の日光・谷川・浅間・秩父・大菩薩から丹沢まで、スマックもなく、靴のかかとで身体を一まわしすれば、みんな見えます。

勤務先の材料研究の親玉が山好きとして、吹上駅の陸橋の上で一緒に足を留めて、「吹上より見える山々」というマップを作ろうやと何回か相談が纏まっていますが、判らぬやツは実地踏査をしようという段になつて立ち消えになっています。彼も当年五十才ですか

始まります。

初めての冬に気づいたのですが、この山の話は長続きは致しません。ボスが寂しそうな顔になるからです。

吹上町は人口一万八千人、勤務先の工場が四千人ですから、ドジャースタウンならぬ、富士電機タウン的なところです。総務担当の私が町に出ますと、頭の上下動がいそがしく目玉は左右に良く動き、腰はギックリ腰になります。帰りがけにジュネーヴに行き、

工場の労組委員長は私と同じ四十才で、旧岳連の熊谷山岳会の会長さんです。つい最近

まで谷川は一の倉で這つてみたり、スイスへ山好きの私も、四回目の冬を迎える当節、

シャルレの穴あき」の故郷でもありますから。いつて足を挫いたりしていますので、当人は風の吹く日の吹上町は山が良く見えます。

現役だと思っています。窓口の私との仲は至って宜しくて、昔の日本山岳会のようなこと

はありません。

春と秋の賃金にからまる年中行事が始まるとこの委員長と私、それに工場のボスの三人が良く集まります。ボスは五九才ですがブラックシャフトで二二〇ヤードは球を運ぶほど元気さです。若い頃は良く山に登つたよう

で、北アから東京近郊に至るまで良く勉強していますから、時には口火を切つて山の話が始まります。

した。金沢工専卒のボスにとつて、自慢の息子であつたことは間違ひありますまい。遭難は嚴冬の北穂で、遅れた部員を探しに一人で

引き返し、そのまま帰つてこなかつたそうです。

工場では山の話をあまりしなくなりました。しかし、吹上駅の陸橋上での材料研究の親玉との会話は続いています。これからの吹上駅陸橋上の展望は身ぶるいする程素晴らしいものですから。ただし、身ぶるいの半分はカラッ風の所為ですけれども。

原稿（タイプ用紙十枚）をたたき終え、写真の地図を添えてアルパイン・クラブ（ロンドン）へ送った。ジャーナルの編集長、E・C・パイアットから四月頃に手紙が来て、九月末締切りで四千字で書いてくれとのことであつた。

まだ三ヶ月、まだ二ヶ月と思つてゐる内に

一ヶ月となり、大周章で整理はじめた訳だが、簡単な題ほど纏めるのは難しいものである。例えば火山一つとっても活火山と休火山と死火山が幾つあるのか、瞭きり書いてある資料は余りない。

この十一月六日で私も到々満七十歳ということになる。ベンちゃんも同じであろう。幾つになつてもコキ使われるというか、自業自得というか、兎に角、悲鳴をあげたくなる位に忙しい。もうそろそろ会社を辞めて山一本寝てしまふの間、といふ風なところでいろに絞つた方がいいのではないかと思っている。

それでなければ宿題が片づかないし、死ぬまでにやつておきたいことも出来ないからである。

この間漸やく『日本の山々』という英文の

三郎氏の追悼文を三〇〇字で書いて十一月半ばまでに送れ、ということを又言つてきた。横さんにこのことを連絡してお知恵を拝借し・パイアットから四月頃に手紙が来て、九月からいろいろの資料を集めて書き出したら英文で二〇〇〇字ばかりになつてしまつた。これを四分ノ一に縮めなければならなかつたのでこれ又一苦労であった。

それにしても松方氏がアルバータ初登頂の一員であつたり、「父と子の山」の著者として紹介してある資料などは困る。そう書いてある一流新聞もあつた。自分のことさえ忘れてしまつてゐるのだから、正確なことを書くといふのはなかなか難しい。しかし注意しなければいけないと思う。

十月の十七日にNHKでリハーサルと本番の書き出しでは面白くない。どうしてやろうかと、電車の中、たまに乗るタクシーの中、の録画、録音をやつた。四十九年一月の十三日、十七日、十八日の三回放映するといつていたが、私の出るのは三十分間の内のホンの二、三分、言ってみればサシミのツマみたなものである。スポット・ライトの題は「マカルーの旗」、出演者は司会の永六輔や原真

として言わないことにしておこう。それにしても三月も前にリハーサルをやるとは気が早いといふか長いといふか呆れたものである。

今年は八月に黒姫山に登った。久振りに二〇〇〇m以上のところに立つた訳であるが、案外足も心臓も丈夫なのには私より他の人達の方が驚いていた。

会社の人達との旅行だから女性が約半分、

案内と人夫を引受けてくれた長山協の人が二人。彼らはスキーの達人であるが夏山は知らない。だから帰えり道を間違えて少しひどい目に過つたがこれもいゝ経験になった。

では今回はこの位にして次回は十一月十日前後に盛岡付近で開かれる、第五回ヒンズー・クシュ・カラコルム会議」から始めるこにしよう。  
(四八・一〇・二六記)

若干、ふとりぎみの江面は新人時代、決して、強い方ではなかった。つまり、よくバテて、荷物の分配が我々にあつた筈で、どちらかと云うと世話をやかせた新人であつた。しかし二年部員になつてからは、それがなくなり、中堅部員、さらに上級部員として、充分

## 江面のこと

渡辺嘉佑

会員江面誠二氏には昭和四八年九月一日、ご逝去されました。悼しんでおくやみ申し上げます。

な活躍をし、かつ、部を盛りたててくれた。彼は、冬山合宿、春山合宿には参加したことはなかつたが、スキー合宿を含め他の合宿にはほとんど顔を出していたので、彼との山での思い出は多いが、二年の時の秋の荷上げが、つらくもあり、のんびりもした山行として、江面と一緒に登つた山として印象が強ないので、それを書いてみたい。

冬山に槍・穂高の稜線をと云うことになり、秋に槍沢から肩の冬季小屋へ、荷上げに行つた時のことである。横尾にテントを張つて、荷上げを行つたが、灯油がもれたの、荷物が重いの、バテて水たまりにひっくりかえつた眼鏡をかけたにこにこ顔が、冬山と春山をのぞいた、他の合宿、部室でいつも見られた。

若干、ふとりぎみの江面は新人時代、決して、強い方ではなかった。つまり、よくバテて、荷物の分配が我々にあつた筈で、どちらかと云うと世話をやかせた新人であつた。しかし二年部員になつてからは、それがなくなり、中堅部員、さらに上級部員として、充分

をバリバリとすつとばして歩いた。

卒業後もスキーや、針葉樹会の席で、三十

五年卒として東京在住の少ない中でよく顔をあわせたが、ここ二三年は、会っていなかつた。事故の報に接して、すぐ浦和の彼の家にすつとんで行つたが、遺族の方々も信じられぬ様子であった。彼の安らかな眼りと、遺族の方々の今後のがんばりを祈らずにはおれない。

最後に、同期のものとして、いろいろ心配下さった針葉樹会の皆様にお礼を述べさせて頂きます。

## 原稿募集

次号三九号は一九七三年の山行特集を

メインテーマにします。

皆様の山行表を例年のように寄稿して下さい。メモ程度のものでも送つて頂ければ、こちらでまとめます。

例年、年の瀬は忘年会が恒例となっていましたが、今年は十二月十五、十六日に懇親山行が予定されていますので左記のとおり新年会を催したいと思います。  
奮ってご参加下さい。

### 一、送り先

岡田健志宛

▼一〇〇

記

千代田区丸ノ内一ー三ー二 住

友化学工業㈱東京ポリプロピレ

ン部  
一、日 時

昭和四九年一月二二日（火）

午後六時半より

### 消 息

#### 一、締切日

昭和四九年二月末日

一、場 所

如水会館 南北日本間

佐藤久尚氏

一一月一七日ご結婚

加藤正己氏

一二月二日ご結婚

## 新年会のご案内

## 編集後記

会報復刊第三八号をお届けします。

× × × × ×

会報を担当して今号で丁度十冊目になりました。最初の二九号を一九七一年六月末に出来ていますので、二年半で十冊ということになります。

× × × × ×

この間少しでも会員諸兄の心を慰さめることが出来ていたら望外のよろこびです。

× × × × ×

今年も押し迫りましたが、良い新年をお迎え下さい。

来号は三月頃に出す予定です。

(岡田健志)

## 針葉樹会報 復刊第 38 号

発行日 1974 年 1 月

発行人 針葉樹会 代表 望月 達夫

編集人 千代田区丸ノ内 1-3-2 住友化学工業(株)

東京ポリプロピレン部 岡田 健志

印刷所 美豊堂

